



Title	中国における文化大革命期の体育思想とサッカー：持続と変容をめぐって [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	李, 晋寧
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第15802号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/92371">http://hdl.handle.net/2115/92371</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	LI_Jinning_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：李 晋寧

主 査 教 授 池田 恵子  
審査委員 副 査 准教授 崎田 嘉寛  
副 査 講 師 山崎 貴史  
副 査 特任助教 劉 暢（国際武道大学）

## 学位論文題名

中国における文化大革命期の体育思想とサッカー

—持続と変容をめぐって—

本研究は文化大革命期（以下では文革期と略す）の政治思想が生み出した体育思想とサッカーの関係に着目し、改革開放期以降に至るまでのその影響力の持続と変容の問題を歴史的に明らかにすることを目的としたものである。周知の通り、文革期の政治思想は海外との内通を防ぐ目的で、西欧由来の体育・スポーツ関係者の弾圧を伴ったことから、スポーツそれ自体が抑圧された文革期前半の政治的混乱の中でサッカーに関する史料の多くも失われている。それゆえ、本研究は研究史上の空白を埋めることにつながり、かつ、先行研究が捉えていた中国におけるサッカー発展の停滞理由、すなわち、西欧由来のスポーツの文化的土壌の欠如という主張に疑問を呈するものであった。つまり、空白期とされた文革期のサッカーに何が起こり、それが、その後の社会にどのような持続的影響力及ぼし、かつ変容したのかを問うことなしに、文化の停滞を根拠づけることは困難であるという歴史的探究の意義を含み持つ。そして、そのような文革期に端を発する体育思想とサッカーとの関係史を克明にするために以下のような方法論上の工夫がなされている。まず、文革期に西欧との内通が疑われ、関係者が弾圧されたサッカーについて詳細に論じる研究はこれまで殆どなされてきていないため、史料上の探索を続け、民衆の視点を有する同時代の日記に着眼している。具体的には文革期の隠れた書物、『球迷日誌』と題されたサッカーファンの日記分析を行い、

政治的に敏感な時代のサッカーの実態史に迫っている。次いで、俗に、ピンポン外交として知られるスポーツ外交政策の要となった体育思想とサッカーとの関係も明らかにしている。つまり、共産主義の側からは、資本主義的な競技スポーツ経営は、勝利至上主義に基づく野蛮なものであり、共産圏独特の体育思想として、文革期の後半以降の体育・スポーツ参与を正当化した「友好第一、競技第二」と呼ばれた外交戦略であり、かつ体育思想であった理念の問題を扱うことであった。具体的には、中国の『体育報』の記事分析を通して、この思想の社会的影響力に迫り、1980年においてもなお、中国の伝統的道德規範とも馴染むと考えられていた「友好第一、競技第二」の持続的側面と、八百長試合をしてまで「友好第一」の精神を貫くことは、真剣勝負の遊戯精神を基底とする真のスポーツ・パーソンの理想に反するという新たな反論が生まれていたことを明らかにしている。以上は文革期の政治思想とサッカーと題された第一部の内容を構成している。加えて、第二部では文革期に毛沢東が提唱した男女同権思想を援用して成立した女子サッカーの誕生過程を抵抗とオルタナティブの観点から象徴的に描いている。最終章では、フランスの歴史学者、ピエール・ノラによる歴史学的手法、「記憶の場」に依拠し、文革期を回顧して叙述された自叙伝とサッカー専門雑誌を扱い、文革期の個人や集団の記憶を通して、第2章、第3章で論じた政治思想とサッカーの関係の再構築を試みている。この1980年代を中心とした回顧録は、文革期のサッカー関係者はサッカーから強制的に引き離され、農村に送られ、政治的な審問に怯え、生活不安から自殺した者もあったこと、「友好第一、競技第二」思想を否定し、文革期の階級闘争の影響を「負の遺産」と捉える集団記憶が心に刻まれていたことを明らかにしている。

こうした手法は、民衆史からの視点を伴い、かつ、西欧由来のスポーツの文化的土壌の欠如によりサッカーの進展は妨げられたとする先行研究の主張を越え、「過去の想起としての記憶ではなく、現在のなかにある過去の総体的構造としての記憶に関心を寄せる歴史学」という「記憶の歴史」を通して、文革期のサッカーの空白を補い、政治と民衆心理、スポーツの間に存在した葛藤の在り様の明示化につながっている。以上の観点を審査委員会は評価した。同時に幾つかの課題提示もなされた。

ひとつとして、本研究では後のスポーツ雑誌、新聞報道、日記や回顧録を用い、「記憶の歴史」という方法論に依拠して、文革期の体育思想とサッカーの関係性を明晰にすることを試みているが、同時代の史料探索、二次史料を含めた文献渉猟を引き続き行い、全体史を補完する必要性も指摘された。さらに、全体構成と研究の意義をわかりやすく伝えるための力量をあげることも課題とされた。とはいえ、習近平が2015年以降にサッカーの強化をはかるよう国を挙げて指針を示したことは中国サッカー史上の転換を意味し、スポーツの遊戯的本質から離れて、政治的効用を意図した従来のな体育活動の歴史を文革期から半世紀以上を経て総括することは意義を伴うとする本研究の主張に理解を示し、学位論文に相当する学術的見解が示されているという点で一致した。よって著者は北海道大学博士(教育学)の学位を授与される資格があるものと認める。